

# 霞

- 2009年度冬季展示室だより -

土浦市立博物館

平成22年1月5日発行(通巻第10号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(10)

絵葉書「土浦名所 川口町通り」 大正末~昭和初期



## 目次

古写真・絵葉書にみる土浦(10)・・・	1
博物館からのお知らせ・・・	1
【2009年度冬季の展示資料解説】	
市内の集落遺跡と墨書土器(古代)・・・	2
県指定文化財「絹本著色釈迦涅槃図」(中世)・・・	3
商家の規則(近世)・・・	4
香澄小学校の卒業証書(近代)・・・	5
繭市場と土浦町(近代)・・・	6
市史編さんだより・・・	7
「霞」短信 養蚕に挑む!・・・	8
コラム(10)・・・	8
情報ライブラリー更新状況・・・	8

土浦名所と題された絵はがきシリーズのなかの一葉で、現在の「川口町」バス停付近から亀城公園方向を望んだ風景。写真の川口川は昭和7(1932)年に埋め立てられ、祇園町通りとなる。奥に見える建物は土浦繭糸市場(豊島百貨店)で、塔はかつての土浦警察署前にあった火の見櫓である。画面の左手に見える煙突群は、製糸工場や繭市場の繭乾燥設備にともなう煙突である。  
【情報ライブラリー検索キーワード「川口町通り」】

## 博物館からのお知らせ

館長講座(茂木雅博館長) 1月17日・3月21日(日曜日) 2月はお休みです。

土浦の雛まつり 2月13日(土)~3月3日(水)

期間中、和服でご来館頂いた方には特別展ペアチケットをプレゼントいたします。

「わた から もめん へ」はたおり教室・むいむい・綿の実 手織り展

2月20日(土)~28日(日) はたおり教室受講生と卒業生による作品展示・活動紹介。はたおり(裂き織り)・糸紡ぎ・綿の種取り体験コーナー・映像コーナーもあります。

第31回特別展「幼児教育コトハジメ~マチの学び舎、土浦幼稚園~」

3/20(土)~5/9(日)

茨城県で最初に開園した土浦幼稚園に残る教材・教具などを中心に紹介し、明治から昭和初期の保育を再現するとともに、地域が支え、育ててきた幼稚園とは何かを探る展覧会です。

記念講演会 「教育玩具の時代と土浦幼稚園」(予定)

講師:大妻女子大学准教授 是澤博昭さん 会場:博物館視聴覚ホール

日時:4月24日(土) 14:00~15:30 定員:70名(先着順)



博物館マスコット  
亀城かめくん

特別展の展示作業にともなう臨時休館日があります! 3/15(月)~19(金) 5/10(月)~14(金)

また、3/14(日)は展示室3を臨時閉室いたします(展示室1・2と土浦城東櫓は無料開放いたします)。

今春は展示室3で特別展「幼児教育コトハジメ」を開催するため、2010年度春季展示「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」は5月15日~6月中旬までとなります。「霞」第11号は5/15発行予定です。

お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

# 古代の集落遺跡と墨書土器

## - 村落内寺院の発見

古代日本の律令国家は、中国から伝わった文字（漢字）と文書によってあらゆる政務が執り行われていました。人々を支配するための基本的な文書が、戸籍と計帳（租税台帳）です。戸籍には、戸主以下ひとりひとりの氏姓、名、年齢などが記され、六年に一度更新されました。また、人々には租（収穫量の3%の稲）、庸（労役あるいはその代納物）、調（布などの特産物）など様々な税負担が課せられていましたが、これら税の徴収と管理を行ううえでも文字が大きな役割を果たしていました。都に運ばれた調・庸の物品には荷札がつけられ、税を納めた地域名、個人名、物品の内容、数量などが記載され、麻布などの繊維製品には布そのものに地域名や個人名などが墨書されました。行政文書は、国や郡の役所においておもに役人の手によって記されたもので、集落のなかで文字や文書と出会う機会がどれほどあったかは定かではありません。ましてや、一般の人々がこれらを十分に理解することは難しかっただろうと考えられます。

一方で、全国各地の古代の集落遺跡からは、文字を記した墨書土器が数多く発見されています。また東日本では、発掘調査によって奈良～平安時代の集落遺跡の中に仏教施設が存在したことが明らかになってきています。これは、瓦葺の塔や金堂、講堂などの荘厳な伽藍配置をもつ国分寺などの官寺とは異なり、茅葺の小規模な建物で、その中に仏像や瓦塔・瓦堂が安置され、灯明が灯されていたと考えられます。そして、集落内からは具体的な寺名などを記した墨書土器が出土するケースが多く見られます。

土浦入り北岸の田村・沖宿遺跡群では、寺畑遺跡と長峰遺跡から寺跡と思われる掘立柱建物が見つっています。寺畑遺跡では、墨書土器に「千寺」、「千手寺」という寺名を記したものの、「案豊」という僧名を記したものがあります。寺は四面に庇をもつお堂のような建物で、その寺名から千手観音菩薩を安置していたと想像されます。また、間口4間、奥行き1間の僧房のような長屋風の建物跡も見つっています。長峰遺跡からは、「長谷寺」という墨書土器が出土しています。また、国府や国司との関連を示唆する「国厨」という墨書土器もみつっており、一般の集落では発見例の少ない二彩、三彩、緑釉などの高級陶器も出土しています。ムラの人々が建てた「堂」や「僧房」は、共同体の仏教施設であると同時に、集落共同の倉庫や旅人や旅の僧の宿泊場所など多様な機能を有していたと考えられます。このような「村落内寺院」遺跡の様相をみると、地方の村々を巡る僧の活動も想定されることから、一般の集落や民衆へ文字や文書が普及するきっかけとして、仏教の果たした役割の大きかったことが想像されます。（塩谷修）



墨書土器  
（左から）  
「千手寺」  
「千寺」  
「国厨」  
「案豊」

1/9（土）午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
根鹿北遺跡出土の瓦塔・瓦堂（古代・中世コーナーに展示）  
田村・沖宿遺跡群出土の二彩・三彩陶器（古代・中世コーナーに展示）



# 県指定文化財「絹本著色釈迦涅槃図」

## - 釈迦の入滅を悲しむ人々や動物たち

涅槃図は涅槃会（注1）に用いる図で、釈迦が80歳の時に跋提河（注2）西岸のほとり、宝牀台の上に右手を手枕にして横たわって入滅する様子を描いたものです。

この図には、天上界右上方より釈迦の生母である摩耶夫人が侍女を伴って降下し、左上からは加陵頻伽（注3）が飛来しています。ほぼ中央の上には満月が描かれ、天上界と地上界を分けるように跋提河が流れています。東西南北に一双ずつある沙羅双樹（注4）のうち右側の4本は、悲しみのあまり白く枯れてしまい、左側の4本は、時ならぬ花を咲かせています。また、左から3本目には、釈迦が使用した錫杖に鉢の包み袋が結びつけられて枝に吊り下げられています。

釈迦が横たわる周囲には、菩薩、羅漢、弟子、王侯貴族、庶民が歎き悲しんでいる様子が描かれています。図の下部には、傷みにより分からないものもありますが、ほぼ左側からワシ、ハクチョウ、鳳凰、シチメンチョウ、キジ、ニワトリ、スズメ、タカ、ワニ、トラ、ヒョウ、カラス、イヌ、カエル、トンボ、ゾウ、麒麟、オウム、サル、チョウチョ、トカゲ、ヒツジ、ウシ、獅子、カモ、ウサギ、ネズミ、カニ、カタツムリ、ヘビ、ウマ、イノシシ、アリ、カマキリ、サギ、ツルなどの動物や霊獣、昆虫が描かれています。

この涅槃図は、文和3（1354）年に宅間式部法橋長祐によって制作されました。長祐は、鎌倉・南北朝時代の絵仏師で、宋元画（注5）の影響を受けた画風が特徴とされ、本図にもそれがうかがえます。また、4点の古文書が附随しており、これによると法雲寺の涅槃図は、もと六浦（現横浜市金沢区）の浄願寺（注6）のもので、後に筑波山禅源寺の什物となっており、さらにその後、法雲寺に伝わったものであることがわかっています（注7）。

縦横160cmにもなるこの涅槃図は大変見応えがあり、人や動物を見ているだけでも時間がたつのを忘れてしまいます。博物館では、絵画の細部までご覧いただけるように、受付で単眼鏡（拡大鏡）を無料で貸し出しています。涅槃会に合わせて、細部まで鑑賞してみたいはいかがでしょうか。（中澤達也）

- （注1）釈迦入滅の陰曆2月（今は3月）15日に行われる、釈迦を追慕するための法要。
- （注2）中インドにあった末羅国の都市クシナガラ城外を流れる川。今日の北インド、ウッタルプラデーシュ州カシヤ。
- （注3）仏教で雪山または極楽にいるという想像上の鳥で、妙なる鳴き声を持つとされることから、仏の音声の形容となっています。その姿の多くは、人頭・鳥身で表現されています。
- （注4）8本の沙羅の木は、釈迦の最初の説法において説かれたとされる、修行の基本となる8種の実践徳目である八正道を象徴しています。
- （注5）中国の宋代（11～13世紀）と元代（13～14世紀）との絵画。
- （注6）源頼朝が建立。焼失により龍華寺と改名。常陸極楽寺開山の忍性が正嘉（1257～59）年中に住しています。
- （注7）ただし修復時に確認された表装の軸には「武州六浦庄蔵福寺住涅槃像 大勳進聖別當浄願坊圓慶（花押）」と墨書されています。



絹本著色釈迦涅槃図

2 / 6 (土) 午後2時から このページでご紹介した 資料の展示解説会を開催 いたします。	下記の資料もあわせてご覧ください。 小田治久肖像（古代・中世コーナーに展示） 法雲寺出土瓦（古代・中世コーナーに展示） 涅槃図付随の法雲寺文書（古代・中世コーナーに展示）
--	--



# しょうか きそく 商家の規則

いろかわほんてん ごじっかじょうじょうもく

## - 色川本店五十ヶ条目 -

何人かが集まって仕事をする際には、規則やルールを定めると行いやすいようです。学校や職場など集団に属している人々が同じ目標を掲げ、ルールを守るとは大切なことですね。

いつでも確認できるように、規則やルールを見えるところに掲示しておくこともあります。江戸時代後期、土浦の商家に張られていた店の規則が写真の古文書です。長時間日光にさらされていたため、和紙の変色や傷みが激しいことが写真からも見てとれるでしょう。

この古文書が張られていたのは、中城町田宿（現在の大手町）で薬種店を営んでいた色川三郎兵衛家です。色川薬種店は近在の村に住む医者たちを相手に薬を販売していました。

天保8（1837）年9月に定められた50ヶ条の規則を読んでみると、おおよそ2種類に分けられます。ひとつは火の用心や仲間を大切に、といった道徳的な事項です。出先の神社や仏閣で落書きなどをしないようにという条項もあります。いたずらは今も昔も変わらないようです。

もうひとつは、商家としての経営に関することです。「売り上げはすべて帳面へ記録し、足りない商品は協力して調合しておくこと」「注文を受けたらすぐに帳面に控えて準備すること」「薬を持ち歩く場合は番頭の立ち会いを受け、帳面に控えておくこと」など、日常においてもっとも大切にされたのは、記録しておくこと、それを検討して対応することでした。

色川薬種店では医者に薬を預けておき、使った分だけの代金を使用人が集金に廻っていました。50ヶ条のうち12ヶ条は、このような使用人が集金をする際の心得について言及しています。「旅先でも俟約を心がける」「飲酒・博打は一切禁止」「貸し金は物腰柔らかに集金するように」「旅先の盗難や火事に注意する」など、主人の目の届かないところで商品や現金を持ち歩く使用人に細かな規則を設けていました。

規則があるのは、規則を作らなければならない現実があるからです。色川家の日記『家事志』には、使用人が主人に従わなかったり、金品を持ち逃げしたりした話がたくさん出てきます。

その店ならではの規則を作っていたのは色川本店だけではありません。規則の制定や独自の経営の工夫が「商人の町土浦」を形成してきたのです。（木塚久仁子）



色川家の日記『家事志』は現在第3巻まで刊行されています。受付・図書閲覧コーナーでは是非ご覧ください。

覚（色川本店五十ヶ条目冒頭部分）



1 / 30（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
鑑札（近世コーナーに展示）  
色川薬種店版木（近世コーナーに展示）  
醤油屋仲間証文帳（複製品）（近世コーナーに展示）

# かすみ 香澄小学校の卒業証書

## - 明治時代の女子小学校 -

香澄小学校は土浦市立土浦小学校の前身となる学校のひとつです。土浦小学校は明治6(1873)年2月に、瀧泉寺(市内中央二丁目)の本堂を借り受けたのがはじまりですが、その後は神龍寺(文京町)、浄真寺(立田町)も使用しながら授業が行われました。同年5月に瀧泉寺校を女子校とし、翌7年10月、旧土浦藩会所(中央一丁目、現在の裁判所の向かい)に女子小学校を設置し、香澄小学校と称しました。当時は小学校専用の校舎はありませんでした。

写真は鈴木はなさんの証書で、「小学初等科第二級卒業」とあります。当時の小学校は初等科と中等科があり、それぞれさらに8級に分かれ、半年ごとに昇級試験がありました。合格すると「卒業」し進級できるようになっていたのです。当時は現在のように義務教育ではありませんでした。この証書とともに残されている試験得点表によると、科目は、修身・読法・作文・習字・算術がそれぞれ10点満点で得点がつけられています。表には「受持仁科礼之助」「主験者 中田正敬」とあり、担当の先生だけで行なう試験ではなかったようです。ちなみに鈴木はなさんは優等で二級を卒業し、一級に進んでいます。

土浦小学校の沿革誌には、明治17(1884)年9月の後期定期昇級試験と卒業試験の結果がありますが、香澄小学校の在籍生徒322人のうち、昇級受験304人、優等256人、及第48人、落第0人とあります。この時の受験生は全員進級できたようですが、別の年は落第生がいますので、それなりに厳しい試験であったと思われる。真鍋小学校の『創立百周年記念誌なでしこ』には試験のようすについて、香澄小学校に1年通ったのち、真鍋小学校に編入した菊田とくさんの話があります。「試験といいますが、当時新治県の試験委員と先生方が威儀を正して並んでいるところへ、一人一人拍子木の合図で呼び出しをうけ、読本(よみ方)・珠算・習字など一々問題を出して、よみ・かき・そろばんが主体で試験される次第でした。」。おそらく、鈴木はなさんも同様の試験を受けたことでしょう。

明治19(1886)年の小学校令により、小学校は尋常・高等の二等に分けられ、修業年限はそれぞれ4年、尋常小学校4年は義務教育となります。土浦小学校は3校に分かれていましたが、西校と高等女子小学校(旧香澄小学校)とを廃止して、東校に土浦尋常小学校を設置しました。ちなみに、鈴木はなさんは明治19年10月31日に前述の5科目に加え、礼法・地理・博物・画術・裁縫の試験を受け、高等女子小学校の「小学中等科第五級」を卒業しています。(宮本礼子)



香澄小学校の卒業証書

3 / 6 (土) 午後2時から  
このページでご紹介した  
資料の展示解説会を開催  
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
校舎新築寄付集金通知・領収書(近代のコーナーに展示)  
附属幼稚園寄付褒状(近代のコーナーに展示)  
明治時代の教科書(近代のコーナーに展示)



まゆいちば

# 繭市場と土浦町

## - 繭の集散拠点と土浦最初の百貨店 -

かつて多くの農家では、養蚕が盛んに行われていました。土浦地方で養蚕が盛んになったのは明治時代中頃からのことです。繭は出荷後すぐに換金できるため、農家にとって重要な生業であったのです。かつての土浦町とその周辺には蚕卵紙を売る種屋をはじめ、繭の取引をおこなう仲買人や各地の製糸工場の出張所、繭から糸を引く製糸工場などがありました。周辺にたくさんの養蚕農家を抱え、常磐線により多くの繭を出荷できる地の利を活かし、大正時代の土浦町は繭の一大集散地でもありました。そうした養蚕全盛期の土浦町のシンボリック的存在であったのが「土浦繭糸市場」(繭市場)です。

蚕は4回の脱皮をして成長すると、糸を吐いて繭をつくります。繭のなかで蛹から成虫(蛾)となるわけですが、繭を破って成虫が出てきてしまうと製糸には利用できないため、乾燥機にかけて繭の中の蛹を殺す必要があります。したがって近くに乾燥設備がない場合、出荷を急がなければならず、仲買人などに繭を買いたたかれてしまうことがありました。

大正時代、繭の仲買を行っていた豊島庄十郎は、養蚕農家の救済と繭価の安定のためには、乾燥設備をもつ繭市場の設置が必要と考えました。そこで、関西方面の繭市場を視察のうえ、大正6(1917)年、川口川沿いの本町(現中央一丁目)に繭乾燥設備をそなえた「土浦繭糸市場」を開設しました。繭市場はしだいに盛況となり、大正10年頃には土浦町へ集まる繭の半分が繭市場で取引されるようになります。農家から出荷された繭は乾燥機にかけられ、土浦駅から県内外の製糸工場へと送られました。最盛期には繭市場の前は繭かごを積んだ荷車でいっぱいとなり、交通整理の警官が必要だったと伝えられています。



そうした繭市場ですが、繭の取引を行っていない期間は、百貨店として営業していました。大正14年発行の『土浦案内誌』には次のような案内があります。

「土浦の花といわれる豊島の百貨店は名のごとく金銀時計、呉服太物、楽器類、和洋小間物、和洋玩具、文房具から下駄足袋傘の類、その他すべての日用品何でもあるという便利重宝な店である。」

大正13年、日本のラジオ放送開始に際して、土浦町ではじめてラジオを設置し聴衆会を開いたのも豊島百貨店でした。豊島百貨店は土浦町の情報発信の場でもありました。

昭和11(1936)年、繭取引に関する法律の改正後、繭市場は閉鎖されて百貨店一本の営業となりました。戦後は霞百貨店、さらに京成百貨店とかわりました。(萩谷良太)

「土浦繭糸市場と豊島百貨店の景」(『土浦案内誌』より)

2/27(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
ラジオ聴衆会の案内(近代のコーナーに展示)  
土浦地方の養蚕関係資料(近代のコーナーに展示)  
土浦地方のはたおり道具(近代のコーナーに展示)



# 市史編さんだより

## ～ ～ ～ 土浦藩士 関家文書について ～ ～ ～

博物館展示室3には、「関流砲術」のコーナーがあり、土浦市指定文化財にもなっている火縄銃が展示されています。「抜山銃」と「谷神」という勇壮な銘がつけられた火縄銃といっしょに火薬入や玉の鋳型など砲術にかかわる付属品がずらっと並べられ、迫力があります。実は、関流砲術に関してはこのような実物だけでなく、3000点を超える多くの古文書が遺され、重要な歴史資料となっているのです。

土浦藩士関家は、江戸時代に砲術の流派（南蛮流または関流）を確立しました。江戸時代の砲術は馬術や弓道のように武家の修業すべき武術の一つでした。10 匁玉から稽古を始め、段階的に伝書を受けられ、免許皆伝となります。砲術の免許を受けたことで、藩主から褒美をいただいたり、扶持（給金）が上がることもありました。稽古は土浦藩の江戸の藩邸などで行われたので、関流砲術は幕臣や相馬藩など土浦藩以外にも伝授されていきました。相馬藩は、土屋家から養子に入った藩主がいたこともあり、関流砲術の師範を藩で抱えるようになりました。

砲術には、玉目の大きさを競うほかに、飛距離を競う町打がありました。これは、距離の長い場合には1500メートル以上もの距離での稽古や演武でした。現在の中貫町近郊での町打の成功によって関家は土浦藩主より小袖を褒美としていただいています。

関家は砲術を指南するだけでなく、土浦藩の役職も勤めていました。使番や留守居役のほかに、幕末に藩主が大坂城代を勤めた時期には、大坂での御用掛なども勤め、藩の中でも実務的な要職についていました。幕末には、高島流などの西洋砲術も学んでいました。明治以降には、美術学校に学んだり、尋常小学校の校長を勤めた人もいます。

関家に遺る古文書の中で、砲術に関するものとしては、弟子に段階的に伝授された伝書類、入門や印可を受ける時に弟子が提出した起請文、伝書類を体系的に書き留めたもの、鉄砲の注文書、稽古や演武の記録などがあります。砲術に関する故事を書き留めた文書を見ると、砲術を指南する上で、研究を続けていた関家当主の様子を知ることが出来ます。門弟との書簡（御礼状や演武についての問い合わせなど）では、免許皆伝の後も師弟関係が継続している様子が分かります。また、藩の役職を勤めていた関係で、藩や幕府の法令や慣行について書き留めたものや、藩邸の絵図面なども多く残っています。さらに、特筆すべきは120冊余りの日記類です。延享2（1745）年から明治末まで断続的に書き続けられた日記には、天候や藩での勤務、砲術稽古の様子や門弟とのやりとり、冠婚葬祭についてなど多様な記述があります。砲術宗家として、また武家としての実態を知ることができる貴重な資料であるといえます。その他にも、関家文書には文芸作品や漢学・算術などの書籍も多く含まれています。

幕府の老中まで勤めた土屋家に仕えた関家は、貴重な武家文書を大切に伝えてきた家といえます。関家文書の資料目録は今春に出版予定です。是非、目録をご覧いただき、関家の江戸時代の砲術宗家と藩士という武家のふたつの側面を知っていただけたら幸いです。

江島万利子（市史編さん係 非常勤職員）

# 霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は、はたおり教室卒業生「綿の実」の活動をご紹介します。「綿の実」は2009年7月に阿見町の大日本蚕糸会蚕業技術研究所の協力のもと養蚕に取り組みました。昭和30年代の品種を復元していただき、桑の摘み方から指導をしていただいた研究所のみなさまに誌面を借りて御礼を申し上げます。

## 養蚕に挑む！

博物館ははたおり教室も間もなく20年目を迎えます。10年目までの卒業生は「むいむい系紡ぎの会」、その後の卒業生は「綿の実」というサークルをつくり、それぞれ活動を続けています。このサークルは農家のはたおりを伝えています。これまでは木綿の経緯手紡ぎを織っていましたが、絹の文化についても知るため、昨年「綿の実」は蚕業技術研究所（阿見町）のお世話になり、7月に養蚕を体験させてもらいました。蚕なんて写真でしかみたことのない人がほとんどです。ましてや触るだなんて！最初はちょっと不安でした。

はじめの頃、蚕は黒い蟻のようです。蟻蚕というそうです。2、3日すると白くなりました。蚕は繭をつくるまでに4回脱皮しますが、そのとき蚕は「眠」という動かない状態になります。頭をもたげてじっとしているさまを見て、なんと「可愛い」と感じてしまったのです。そうすると、触れちゃうんです。蚕ってヒンヤリしています。成長はとても早く、1ヶ月後には繭となりました。研究所の方達の忍耐強いご指導のおかげで、大きな繭がたくさんできあがりました。人間ってホント残酷ですが、繭を乾燥室のなかに入れる時は、「なかの蛹さんごめんなさい」の気持ちよりも、豊作の喜びの方が勝っていました。現在は養蚕農家でさえ2回目の脱皮後からしか育てていないのに、私達はとても貴重な体験ができました。養蚕農家が激減してしまった今日、希少な国産の絹を織ることができそうです。いよいよこれから糸をとる作業ですが、座繰りという技術がなかなかうまくいきません。練習あるのみです。

（「綿の実」代表 田中久美子）



## コラム(10) 博物館と温度・湿度のはなし

展示ケースの隅に、小さな白い箱が置いてあることにお気づきでしょうか。全部で6個の箱が置いてあるのですが、実はこれ、展示ケース内の温度と湿度を自動計測している優れものの機械なのです（そのうち2個は照度も計測しています）。データロガーと呼ばれるこの機械を、約1ヶ月に1度の割合で展示ケースのなかから回収し、内部の記録をパソコンに取り込み、ケース内部の温度・湿度の状況や外気・空調による影響が見られないかを確認しています。毎月の計測結果をパソコン上でつなぎ合わせることで、一年間の温度・湿度変化をグラフで表示することもできます。

データロガーは館内の3つの収蔵庫にも設置されており、収蔵庫内の温湿度変化の状況を監視しています。温度や湿度の変化に敏感な資料は、24時間稼働の空調機により一定の温湿度を維持できる特別な収蔵庫に保管されているのですが、もしこの空調機に不調があれば温湿度の変化によって異常を発見することもできます。

小さな機械ではありますが、博物館の資料を守る大切な役割を果たしている計測器なのです。

（萩谷良太）

## 情報ライブラリー更新状況

【2010・1・5 現在の登録数】

古写真 436点(+10)

絵葉書 342点(+10)

( )内は2009年10月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2009年度

冬季展示室だより(通巻第10号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)

は、博物館2階庭園展示です。

2010年度春季展示は、特別展開催のため2010年5月15日(土)~6月中旬となります。「霞」2010年度春季展示室だより(通巻第11号)は5月15日(土)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。